



# 頸髄不完全損傷における身体機能の回復が思春期の障害受容に及ぼす影響

ジェイ・ワークアウト株式会社 リサーチセンター 市川 春菜 渡部 勇 石河 直樹

## はじめに

脊髄損傷受傷前後の身体的ギャップや社会的役割の変化などに対する様々な混乱が生じ、受傷後数年が経過しようともその混乱は継続される。自己を受け入れ、自己実現に向けて適応していくことが重要であり、その方法の一つが社会交流や機能回復に向けた運動である。今回、思春期の慢性期脊髄損傷者に対し、脊髄損傷専門のトレーニング施設において継続的なトレーニングを実施した。その結果、機能回復のみならず精神面においても大きな変化をもたらしたため、その経過を考察を踏まえて報告する。

## 症例紹介

10歳代、男性、2014年8月、水泳の飛び込みで受傷、第5頸髄不完全損傷と診断された。フランケルC1である。左手指と左下肢の随意運動は乏しく、起立性低血圧症状が認められ、椅子座位の状態を保つことも困難であった。障害受容が出来ておらず、「車椅子の自分が嫌」という気持ちから外出や高校への進学もできなかった。母親へ「死にたい、殺してくれても良いよ」との発言も度々みられ、左手指を噛むなどの自傷行為もみられていた。

	トレーニング経過	行動変容
2015年7月	J-Workoutでのトレーニング開始	「死にたい、殺してくれて良いよ」「このままご飯を食べなかったら死ぬかな」等の発言多々あり。左手指を噛むなどの自傷行為 トレーニングに来る際、車椅子で外になければいけず、人目に付くことが嫌。「外出したくない」
2016年8月	肘支持型歩行器での立ち座り動作、歩行練習、自宅での自主練習が可能に	トレーニングに来た際、ポケモンGOをするために車椅子で公園へ外出する。
2017年6月	上半身の軽度介助で両側ロフトランド杖歩行が可能となった	J-Workout 歩行披露イベントへの出場を決意。
2017年8月	J-Workoutに通われている他クライアント様と会話の機会 / 共にトレーニングをする機会を設ける	「水泳やってみようかな」との発言あり。 家族でプールへ。泳ぐことに挑戦。
2017年11月	両側ロフトランド杖にて屋内約420m、屋外約330m連続歩行可能	学校への復学を考えるように。またトイレへ自分で行く事を練習し始める。
	J-Workout 歩行披露イベントにて大舞台 / 大勢の観客の前で歩行を披露 独歩で7m歩行可能	スタッフや家族への感謝の気持ち、次なる目標を舞台上で自らスピーチ。
2018年5月	当施設から両側ロフトランド杖にて花見をする、ファミレスへ行くことに成功	本人の意思でトレーニング中外出することが増えた。

## 結果



# トレーニング +

本人/家族への援助方法を腐心・模索する



### 外出

「びっくりドンキーに行きたい」




### 交流

「〇〇さんみたいになりたい」




### 挑戦

「海へ行きたい」




### FIM

機能的自立度評価表

トイレ 1 → 6

移乗 3 → 18

移動 2 → 6

合計 56 → 105

## 考察

脊髄損傷者は、知覚・運動障害、および合併症や二次障害など永続的な身体機能の障害を事故などにより突発的に負う事となる。特に今回の本症例のように思春期という人生でも感情の起伏が激しい時期に受傷した事は、当人や家族にとって受け入れ難い事実であった。入院期間中のアプローチのみでは精神的自立速度が追いつけず、退院後のアプローチが課題となる。今回、本症例は身体の回復と共に、車椅子での外出や自身の生活動作の向上を行おうとする意欲が高まった。当施設は、症例と同年代の脊髄損傷者も多くトレーニングに励んでいる、このような環境は当事者同士のライバル意識や時には良き相談相手として精神的な支柱となった事も、本症例の希望や活力となったと考えられる。

## 結語

脊髄損傷者が「人生を歩む」ため、脊髄損傷者に関わる者が援助方法を腐心・模索し、適切な時期に必要なアプローチを行うこと、症例が明確な目標をもちそれをサポート出来る環境をいかに提供出来るかが最も重要であると考えられる。